

# 1 白血球は戦う細胞

血液の中には、白血球、赤血球、血小板という3種類の血球があって、それぞれがとても大切な働きをしています。体の中に侵入してきた病原体と戦って体を守ってくれる白血球、肺から取り入れた酸素を体の隅々まで運ぶ赤血球、血を止める働きをする血小板があります。今回は白血球のお話です。

# 2 白血球はどうやって病原体と戦うの？

個人差はありますが、白血球は血液1 $\mu$ L（1つの辺の長さが1mmの立方体）の中に、4000～8000個ほど入っています。一口に白血球といっても、その中でいくつかのメンバーに分かれます。

いちばん数が多い好中球は、敵をパクパク食べて自分の中に取り込んで溶かしてしまいます。

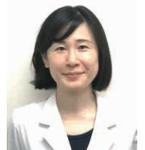
次に数が多いリンパ球は、Tリンパ球やBリンパ球などに分類できます。Tリンパ球は、敵をみつけたら、“戦うぞ！”という合図を出したり、敵に体当たりしてやっつけたりします。Bリンパ球は、“抗体”という敵と戦うための飛び道具を作ります。他にも数は少ないですが、単球、好酸球、好塩基球というメンバーがいて、それぞれ自分の持ち場で頑張ります。これらの白血球のメンバーは、大きさや形が違うので、機械（分析機）で区別できます。

検査のはなし vol.14

## 専門医が教える 見逃せない検査異常…1

# 「白血球」

日本臨床検査専門医会  
井上 暢子



# 3 白血球の検査で異常を指摘されたら？

白血球の検査では、数が多かったり少なかったりと、数の異常を指摘されることがいちばん多いです。しかし、これだけでは“病気”とは言いきれません。もともと、他の人よりも白血球の数が多めの人や少なめの人があります。また、先ほどの説明のように、白血球には病原体と戦う役割があり、数が変動しやすい性質があります。病原体が入ると、みるみるうちに数を増やし、一生懸命に敵をやっつけます。例えば、風邪をひいたタイミングで血液検査をすると、数が多くなっていることがあります。また、一部のウイルス感染では、数が減ることもあります。他にも、薬剤や寄生虫などが悪さをしていたり、栄養不足やアレルギーが影響していることもあります。このような反応性の変化は病気ではないですが、それでは説明できないほどの大きな数の異常がないか、白血球分画の異常（白血球のメンバーの偏り）がないかを見て、本当の血液の病気が隠れていないかを探ります。

# 4 詳しい検査が必要なときもあります

白血球を詳しくみる方法があります。ガラスの上に血液を薄く塗って色素で血球を染めた後に、顕微鏡を使ってじっくりと観察します。形に異常がある時や、幼弱な細胞がみられたとき、血小板や赤血球にも異常がみられたときなどは、骨髄異形成症候群や白血病といった血液の病気が疑われます。より詳しい検査では、骨の中の骨髄（血液の生産工場）をとってきて、血球の数や形をみることもあります。このような検査が必要な場合は、血液疾患の診療を行う医療機関でみてもらう必要があります。

